

現代日本語のタリに関する一考察 —並列節マーカ―の語用論的分析—

長辻 幸 (奈良女子大学大学院)

1. はじめに

接続助詞タリ— 動詞句や節を対等な関係で連結する接続表現の 1 つとして分類されており、連結された動詞句間・節間の並列的關係を表す (森山 1995; 日本語記述文法研究会 2008 など)。¹

- (1) 伊豆では、温泉に入ったり、おいしい魚を食べたりした。
(2) 伊豆では、温泉に入ったし、おいしい魚も食べた。 (日本語記述文法研究会 2008: 256)

本発表の目的: 関連性理論 (Sperber & Wilson 1986/1995²) の観点から、

- (i) タリが発話解釈においてどのような制約を課すのかを考察し、この接続表現にコード化されている意味 (情報) を明らかにする。
(ii) タリとシがどのような点で異なっているのかを明確にし、両接続表現の容認可能性がこの相違点によってどのように説明されるのかを考察する。

2. 先行研究

森山 (1995)— タリによる並列節構造は「複数の事態を並列しながらも、全体としてそれをさらに大きな一つの事態としてまとめて表すもの」(森山 1995: 133) であり、「結合的並列」と「一部列挙」の観点から特徴づけられる。

- (3) 囚人たちは午前 0 時にいっせいに声を上げたり、鉄格子を揺すったりした。
(森山 1995: 135, 下線は引用者)

問題点:

- ① 「結合的並列」の具体的な規定が明らかではなく、並列される複数の事態にどのような特徴があるのかが記述されていない。
(4) ??太郎は背が高かったり、スポーツがよくできたりする。²

¹ タリには、「家の前を警察官が行ったり来たりしている」のように、「行ったり来たり」というまとまりで複合的に機能する用法もある。本発表では、タリによって導入される事態が個別の事態として解釈されるもののみを考察対象とし、このような複合的使用については扱わない。

² (4)では、「背が高い」「スポーツがよくできる」という状態性を表す事態がタリによって導入されているのに対し、これらの事態を括る述語に「する」という動作動詞が使用されていることが、その容認度に影響を与えていると見なされるかもしれない。しかし、(i)や(ii)の例から、(4)の容認度が低くなる要因をこのような語彙的・文法的性質にのみ帰することはできないと考えられる。

- (i) これに対して (馬鈴薯の中でも) 緑色に色づいているものは「しもげてる」と言い、いくら煮ても固く、食べると苦かったりえぐかったりしたから、みなから敬遠された。(BCCWJ, ()内、波線及び囲み線は引用者)
(ii) 自分がやることによって、まわりの人もよくなったり、環境にもよかったりするのが「節約」だと思います。(BCCWJ, 波線及び囲み線は引用者)

②「一部列挙」という特徴はタリの本質的な機能を捉えるための要素にならない。³

(5) 必ずしもそうとは言えないと、本間は思う。抜き打ちに突き飛ばされたり、あるいはほかのことに気をとられていたりすれば…… (『火車』pp. 303-304, 実線及び囲み線は引用者)

3. 考察

○ 語にコード化される意味

概念的意味—発話の表示内容の構成素となる。(e.g. 'dog', 'run')

手続き的意味—発話がどのように処理されるべきかを方向づける。(e.g. 'so', 'after all')

3.1. 接続助詞シにコード化される意味

(6) 夏になると町中の子どもたちが大勢でその浜辺に泳ぎに来た。私は都会育ちだったし、長い戦争のために泳ぎをおぼえるチャンスもなかった。それに比べて、この街の子どもたちはまるで魚のように水と友だちだった。(BCCWJ, 下線は引用者)

→ シで並列された事態はどちらも推論の前提となるような具体的証拠を与え、「話し手は泳げなかった」という共通の帰結を導く。

⇒ 後件 Q (=「長い戦争のために泳ぎをおぼえるチャンスもなかった」) は、「話し手は泳げなかった」という想定に対するさらなる証拠として機能し、前件 P (=「私は都会育ちだった」) から帰結として引き出された想定を強化している。

(7) 接続助詞シにコード化される手続き的意味:

「P シ、Q」形式の発話は、前件 P を具体的な証拠とする推論の帰結を、後件 Q が強化するよう処理することを要求する。

3.2. 接続助詞タリにコード化される意味

(8) 将軍の身体の弱さは一それと時間の経過は一将軍とソラヤのあいだの軋轢をも和らげることになった。二人は一緒に散歩したり、土曜日には昼食を食べに行ったり、将軍がソラヤの教える授業に出たりした。(『君のためなら千回でも』p. 303, 下線は引用者)

→ タリで並列された事態から「非常に仲の良い親子」という特性にアクセスされ、将軍とソラヤの間の軋轢がどの程度和らげられたのかということの理解を助ける。(cf. Blakemore 1997)

(9) これ (=流通系カード) は、利用範囲がその店の系列店舗だけに限られているので、その分不利なのですが、商品の割引や会費の免除をしたり、審査の枠を甘くしたり、売場で即カードをつくったり、いろいろほかの特典をつけて、前のふたつ (=銀行系カードと信販系カード) に対抗しています。(『火車』p. 181, ()内、実線及び波線は引用者)

→ タリで並列された事態から「流通系カード独自の利点」「気軽さ・手軽さ」といった特性にアクセスされ、「いろいろほかの特典」がどのようなタイプのものなのかということの理解を

³ 森山自身、『たり』でも類の意味を強調する用法で、事実上、全部を列挙することがあると言える(森山 1995: 148) と述べており、タリによって並列されている事態が常に同類的特徴を持つ全体の一部として列挙されるわけではないことを示唆している。

助ける。

- (10) 殺人を決心するというのは極端な例だが、「死」にまつわる行事にのぞんだとき、誰でも少しばかり人が変わって、できもしない誓いを立てたり、ずっと秘密にしてきた思い出を語ってみたりするものだ。
(『火車』p. 478, 下線は引用者)

→ タリで並列された事態から「異常な心理状態」「普段なら取らない行動」といった特性にアクセスされ、単一の語彙概念による表示が難しい概念の理解を助ける。

- (11) 接続助詞タリにコード化される手続き的意味:

「P タリ Q タリ」形式の発話は、タリによって導入される事態 (=P, Q) を具体的な事例として、それらに共通する特性を同定するよう要求する。

4. シが構成する並列節構造とタリが構成する並列節構造

- シとタリの相違点

シー 並列節構造がどのように文脈効果を達成するのかという側面への制約
タリー 並列節構造がどのような文脈で解釈されるべきかという側面への制約

- シとタリの交替可能性

- (12) きよとん、と目を見開いて、須藤薫は繰り返した。「様子がおかしかった?」

「ええ、そうです。イライラして落ち着かなかったり、泣いたり」

(『火車』 p. 512, 実線及び波線は引用者)

- (12') 「ええ、そうです。イライラして落ち着かないし、泣くし」

→ 並列された 2 つの事態からアクセスされる「不安定な内面」「あからさまな感情の表出」という特性によって、「様子がおかしかった」という表現で話し手が何を意図していたのかを明確にしている。
⇒ タリのみが容認される。

- (13) ??太郎は背が高かったり、スポーツがよくできたりする。(=(4))

- (13') 太郎は背が高いし、スポーツがよくできる。

→ 並列された 2 つの事態のそれぞれを証拠として「太郎は女の子に人気がある」という帰結が得られ、この想定を強化している。
⇒ シのみが容認される。

5. 結論

- (i) 接続助詞タリは、『P タリ Q タリ』形式の発話は、タリによって導入される事態 (=P, Q) を具体的な事例として、それらに共通する特性を同定するよう要求する」という手続き的意味をコード化している (=(11))。

- (ii) 接続助詞シは並列節構造がどのように文脈効果を達成するのかという側面に対して制約を課しているが、タリは並列節構造がどのような文脈において解釈されるべきかという側面に対して制約を課しており、両接続表現の容認可能性はこの相違点によって説明される。

参考文献

- Blakemore, Diane (1997) "Restatement and exemplification: A relevance theoretic reassessment of elaboration," *Pragmatics and Cognition* 5 (1), 1-19.
- Blakemore, Diane (2001) "Discourse and relevance theory," in D. Schiffrin, D. Tannen and H. Hamilton (eds.) *Handbook of Discourse Analysis*, 100-118, Oxford: Blackwell.
- Blakemore, Diane and Robyn Carston (2005) "The pragmatics of sentential coordination with *and*," *Lingua* 115, 569-589.
- Carston, Robyn (1993) "Conjunction, explanation and relevance," *Lingua* 90, 27-48.
- Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Oxford: Blackwell.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』東京: 研究社.
- 森山卓郎 (1995) 「並列述語構文考—「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって—」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』, 127-149, 東京: くろしお出版.
- 森山卓郎 (1997) 「うどんにマヨネーズかけたりして—並立の意味」『言語』26 (2), 56-61.
- 長辻幸 (2011) 「日本語の接続助詞シにコード化される意味」関西言語学会第36回大会 (2011. 6. 12. 於大阪府立大学) 研究発表ハンドアウト.
- 中俣尚己 (2010) 「現代日本語の「たり」の文型—コーパスからみるバリエーション」『無差』17, 101-113, 京都外国語大学日本語学科.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法 6—第11部 複文—』東京: くろしお出版.
- Ohori, Toshio (2004) "Coordination in mentalese," in M. Haspelmath (ed.) *Coordinating Constructions*, 41-66, Amsterdam: John Benjamins.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986/1995²) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell. (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (訳) (1993/1999²) 『関連性理論—伝達と認知—』東京: 研究社.)
- Suzuki, Satoko (2008) "Expressivity of vagueness: Alienation in the verb-*tari suru* construction," *Japanese Language and Literature* 42, 157-169.
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法 (下)』(日本語教育指導参考書 5) 東京: 国立国語研究所.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京: くろしお出版.

用例出典

- BCCWJ 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」モニター公開データ (2009 年度版) 国立国語研究所.
- Hosseini, Khaled (2003) *The Kite Runner*, London: Bloomsbury. (佐藤耕士 (訳) (2007) 『君のためなら千回でも』東京: 早川書房.)
- 宮部みゆき (1998) 『火車』東京: 新潮社.